

稱へり。曰く、江戸時代の經濟狀態に就きて、曰く、本居宣長、曰く、本多利明、曰く、コロニーの譯語としての開國、曰く、吉田松陰、曰く、島津齊彬公の西洋文物採取是なり。四號活字菊版四九九頁(富山房發行、價、貳、八〇)(中村)

●譯に關する點

法學博士 禮積陳重著

帝國學士院第一部論文集邦文第貳號

譯の習俗が我國有の風習にあらずとする先人の諸説について疑義ありとし、實名を尊んで之れを避くる習俗は人類の普遍的現象と言ふべく、是れ「タナー」の一種にして低級文化民族に於ても、又今日の高級文化民族の往時に於ても、概れ有するもの、殊に太平洋中諸島及沿岸地方の民族中には最も盛に行はるゝを觀る所なり。若し本邦原始狀態に於て此習俗の存在なしとせば是れ世界の特異の一事例を提供するものなれど、精細に觀察するに於ては却つて此風習が我國固有のものなりと思はるべき點多きを指示するは本書の要旨なり。

本書は其始めに「消極觀」として、上代實名敬避俗無しとする學說及其支證を擧げ、本居宣長、藤原爲經、藤井高命屋代弘賢等より近時學者の所説を述べ、其等の論據たる本邦古代の人名は總て美稱なりしを以て名を指すは非禮ならずと云ふ事、又、御子代御名代は諱避の習俗なかりしのみならず、却つて之を重んず風あ

ることの確證なる事等を擧げたり。而して次章「積極觀」に於ては是等の論據を排し、如上の人名を總て美稱なりとするは、人名の起原に關する一般の事實に反する觀あり。又人名と貴號との別を混じたるものにして、且つ人名を總て美稱とするは其實名を忘られたるにあらずやと思はしめ、記紀にある神名人名は美稱と解し得べきもの少からずと雖然も其の中には實名の遺忘せられたるもの多きにあらざるかを思はしむるものあり、又其記紀兩書中にある實名を尊號と誤りたるものありて、畢竟實名稱呼は非禮にあらずと云ふ學說も、却つて尊號のみ遺存して實名傳はらざるもの多きは實名敬避俗の存在を推測せしむるものなりとせり。

又上古に於ける「かみ」^{ミコト}「みこと」の敬稱語は一は對稱者の位置の高きを仰稱し一は「御事」の義にして對稱者を第三位に置きて斜稱したるにして共に直接指稱を避くる思想より來れるなりとし反之稱稱者に自稱代名詞たる「おれ」「われ」等を用ふるは尊稱號稱を表はすもの、之れによつて見るに遠ざかるを以て尊敬とし近づくとを以て冒瀆とする習俗は古來存したるべし。其他地名宮屋居所等を以て稱號とする如きも實名敬避の方法なり。かく諱の習俗は古來存したるべく而して之れに關する禮制に至つては、支那制度の繼受によるものなり。

最後に「比較觀」として、タナーに就いて論じ、實名敬避の習

俗は觸接のタプーの延長なり。このタプーは文化の或程級に於ける普遍的現象なるを詳説せり、尙其習俗を有する民族の分布を説き附するに分布圖一葉を以てせり。本邦に於ては此種の研究從來殆んど闕却されし觀あり、博士が此の研究によりて古代文化の上に新らしく問題の提案せる、は最も悦ぶべき所なるべし。(西田)

●神道沿革史論

文學士 清原貞雄著

上代より徳川末期に至るまでの神道の沿革を純客觀的見地に立ちて説述せるものにして、編を分つ事六、第一編には外國の影響を受けざる以前の固有神道を概説し、「カミ」なる語の意義より其種類を掲げ、神人の關係等に就て國民が如何に解し居たるかを明かにし、それが要素たる祖先崇拜の性質、神道と國民道德、祭祀と農業との關係等を論じ、第二編には始めて外國の信仰を輸入したる結果、從來の信仰に那邊まで影響を及ぼしたるか、又祭祀の形式に於て、支那に於ける儀禮等の取り入れられたる點、又外國信仰の新に輸入せられて神道中に包含せられたるもの等を述べ、第三編には此外國より輸入せられたる信仰即ち儒教、佛教乃至道教等と我神道との關係が漸く熟して、種々の形に於て結合したる由來を説き、夫等の相互又は混淆的關係に依りて新に生じたる信仰狀態、就中、佛教との融合に依りて生じたる本地垂迹説を、其生成の階段を追うて最も詳細に説明し、又此期の特色の一たる陰陽

五行叢縁説の國民生活に及ぼしたる點、殊に神道史上に於ける意義より又此思想に基きて生じたる神祇等に説き及ぼし、第四編及び第五編には主として鎌倉時代以後に勃興せる神道學説、即ち伊勢神道、天台神道、法華神道、眞言神道、儒學者側の神道説、社家の神道等を中心として論じ、殊に此期の特色ともいふべき縁起物の意義並に種類を説き、合せて大成せる本地垂迹説を説明せり第六編は徳川時代に入りて、儒教の勃興と共に神道が佛教と離れ漸く儒學と結びて神儒習合神道ともいふべきものゝ起り、更に儒教と相反撥するに至りしことより、此期の中葉以後隆盛に起きて所謂復古神道學派と儒教者派との間の論争に及び、同時に此期に於ける、從來の佛教神道の如何なる状態にありしかを説き、一方には又此期に入りて發生せる所謂教祖神道なるもの、起源並に其性質を説述し、最後に、明治以後に於ける神道界の趨勢を概説し、佛教界との融合に及び、併せて今後研究すべく又整理すべき諸問題を考察して筆を擱けり。神祇の沿革や、歴代敬神の事實を講述し、又一流派の神道説を紹介せるもの、世間其書なきにあらざると雖も、國民の神道思想の變遷を中心として、各時代に亘り、系統的記述と批判とを加へたること、本書の如きは未だこれあるを見ず。加ふるに其敘事簡明にして行文平易なり。其學者に裨益すること蓋し尠少にあらざるべし。吾人は近刊書中の白眉として、